お菊虫と皿屋敷

投稿日：平成２８年３月９日
投稿者：石橋正彦

３代目桂春団治が去る１月９日に亡くなった。享年８５歳。ＮＨＫ・Ｅテレでは「日本の話芸」の予定番組を変更して、春団治追悼番組として“落語「皿屋敷」”を放映した。普段あまりじっくり落語番組など見ない私が、この追悼番組は録画し、しっかり拝聴した。というのは、題目が「皿屋敷」だったからである。

先般人間研の探鳥会の際に会員のＴさんから「お菊虫」と呼ばれるジャコウアゲハ（麝香揚羽）の蛹のことを教えて頂いた。ジャコウアゲハの幼虫は他のアゲハ類が主として柑橘類や山椒などを好むのに対してウマノスズクサ（学名 Aristolochia debilis）という草の葉や茎だけを食べて育つ。探鳥会で行った公園ではジャコウアゲハを呼ぶためにＴさんらボランティアがウマノスズクサを懸命に育て、7年目にしてようやくジャコウアゲハが飛び交うのを見ることが出来るようになったとか。ジャコウアゲハの蛹は写真のように、2.5㎝位の大きさで、自分が分泌した糸のようなもので自身の体を柱（柵や鉄骨などにも）などに縛り付け、また腹に何枚もの板状の突起を持つ。その突起が皿のようだということで、縛られて井戸に投げ込まれ、一枚、二枚と皿の数を数える「皿屋敷」の主人公お菊のようだ、ということからその名がついたという。

「皿屋敷」は播州姫路の車屋敷の井戸に因むという話と、いや、江戸の番町吉田屋敷の古井戸の話だ、など、調べてみると結構各地に類似の話があるようである。東京都内にはお菊の墓というのが幾つも見られるそうだ。また神奈川学習センターからそう遠くないＪＲ平塚駅近くの紅谷町公園にも写真のようにお菊塚と刻まれた自然石の石碑がある。これは平塚宿の宿役人眞壁源右衛門の娘・菊が奉公先の旗本青山主膳の屋敷で家宝の皿の紛失事件から手打ちにされ、長持ちに詰められて平塚に返されたのを弔ったとされている。

「皿屋敷」の話は旗本青山主膳が、屋敷に奉公しているお菊に懸想して、思いが遂げられなかったため、逆恨みして、家宝の皿十枚をお菊に渡し、そっと一枚を抜き取って隠し、お菊に皿を数えさせて、九枚しかないことを責め、縛って井戸に投げ込み、殺したところ、お菊の幽霊が「一枚、二枚、・・・九枚、あと一枚足りない」と恨み言を言う、という話が主流のようで、内容としては同様な話であるが、播州皿屋敷は歌舞伎、浄瑠璃で、番町皿屋敷は講談で使われているようで、落語では姫路が舞台で播州皿屋敷伝説から来ている。

落語の「皿屋敷」は古典落語の演目の一つで、「お菊の皿」とも題される。あらすじは、播州姫路の主人公まっさんがお伊勢参りの旅先で姫路出身なのに皿屋敷の話を知らない、と馬鹿にされたことから、仲間と連れ立って裏のおやじさん、六兵衛に聞きに行ったところ、青山鉄山とお菊の話を教えられ、近くの車屋敷にある古井戸に出るお菊の幽霊を仲間と見に行くことになる。その際、六兵衛からくれぐれも注意されたことは、「お菊が皿を一枚、二枚・・・と数える際に、九枚目の声を聴くと狂い死にをするので、六枚目になったらすぐに逃げだすように」とのことだった。若者達は六兵衛の教えを守り、六枚まで聞いたところで逃げ出してきたが、お菊があまりにもいい女だったので、若者達は懲りずに翌日も皿屋敷へ出かけて行った。数日もすると人々に噂が伝わり、見物人が膨れ上がり、客席までもが設けられるようになり、身動きが出来ないほどになった。ある日、お菊の幽霊が「・・・、九枚、十枚・・・」、と数え続けても何も起こらず、ついには客が呆気に取られるうちに十八枚まで数えて「これでおしまい」と言って井戸の中に入ろうとするので、不思議に思った見物人が「お菊の皿は九枚と決まっているだろう。何故十八枚まで数えたんだ」と尋ねると、お菊の幽霊は「明日は休むので二日分数えました」と答えたというのが落語の落ち。

「お菊虫」の成虫であるジャコウアゲハはウマノスズクサの葉の裏に産卵し、孵化した幼虫はウマノスズクサの葉や茎を食べて成長する。このウマノスズクサにはこの草の学名に因んで命名されたアリストロキア酸という、植物アルカロイドの一種で、人には腎不全や発がん性があると言われる毒成分を含み、ウマノスズクサはこの成分を有することで昆虫による食害から身を守っている。ところがジャコウアゲハはその裏をかいて、この草を食べることによってこの毒に対する耐性を獲得し、逆に利用して小鳥などの天敵から身を守っている。またメスはウマノスズクサに産卵すると卵にアリストロキア酸を含む液を塗りつけ、孵化した幼虫はまずこの卵殻を食べて耐性を獲得し、武装するという。

ジャコウアゲハがなぜアリストロキア酸という他の生物には毒となる成分を体内に保有して大丈夫なのか、まだわからないらしい。神奈川学習センターの種田先生に教えていただいたのだが、蝶の採集の際に、蝶の翅に左右対称に切れ込みが認められることが多い（1割以上）が、これはBeak markといって、羽をたたんで、留まっている蝶を小鳥が襲って捕まえて食べる際に、うまく羽が切れて逃げ出すことが出来た証拠である由。このことからも小鳥は高率に蝶を食べていることがわかるが、ジャコウアゲハはアリストロキア酸の毒成分による臭いか刺激成分によって小鳥に食べられないらしい。またアゲハモドキという蝶はその姿がジャコウアゲハにそっくりなので、小鳥は騙されて敬遠するのだそうだ。一種の擬態なのだろうが、果たしてアゲハモドキは意識してジャコウアゲハをまねているのか、あるいは偶然なのか、わからない。

暖かくなると冬鳥は北帰行でいなくなるので、探鳥会はなんとなく足が遠のくが、今年は鳥でなく、ジャコウアゲハの幼虫、幼虫の蛹化、蛹の羽化など、是非見てみたいものが増えて今から楽しみである。とくに昆虫は終齢幼虫や蛹から羽化したばかりの時の美しさは驚くばかり、というのが多い。身近な例ではアブラゼミが羽化したばかりの時に、水色がかった白い翅に感歎した経験を持つ方も多いと思う。またスケバハゴロモという1cm位の虫の翅の周縁は成虫では茶色であるが、羽化したばかりの時は本当にきれいなピンクで、出会った時にはまさに感動であった。ではジャコウアゲハが羽化した時は・・・。是非、是非見たいものである。

皿屋敷の話が飛んで行ってしまいましたが、自然界にはわからないこと、不思議なことがいっぱいあって面白いですよね。

完